令和４年１月定例教育委員会

日時　　令和４年１月１９日（水）
午前１０時～正午

１　開会

〇足羽教育長

皆さん、おはようございます。そして、新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。それでは、ただいまから令和４年１月の定例教育委員会を開催いたします。

２　日程説明

〇足羽教育長

それでは最初に、教育総務課長から、本日の日程説明をお願いします。

〇谷口教育総務課長

本日は議案は無く、報告事項のみ７件となります。ご審議のほどよろしくお願いいたします。

３　一般報告

〇足羽教育長

それでは、７件の報告事項に入る前に、私のほうから一般報告をさせていただきます。

まず、新型コロナウイルス対応ですが、昨日西部地区のほうに特別警報が出まして、県立学校を中心に分散登校、分散授業、分割授業、それからオンライン授業等に踏みきりましたので、各委員の皆様には情報提供を差し上げました。またその辺りのことはこの後、事務局連絡事項のところで報告いたしますが、振り返ると１１月は感染者１人、１２月は２年ぶりに０人、そしてこの年明けに入ったんですが、１月４日以降から昨日までで３９３人、一気に過去最多を更新しながら、そして本日もまた最多を更新するような状況になっております。こんな中で学校のクラスターも次々発生をして、鳥取西、鳥取工業、鳥取中央育英、米子東、米子南高校、米子工業高校と、これまでどおりのルールに乗っ取って、感染者が出たことによる臨時休校を行いました。学校関係者の感染者が出れば学校を一旦止めて、調査に入ってもらって対応するというやり方を取ってきてましたが、特に西部は

今、保健所機能が追いつかない状態で、調査にもなかなか入ってもらえないというふうな状況が続いております。その中で特に西部の感染が非常に急拡大しており、市中感染並みだといわれていますが、なかなか感染ルートを追い切れないような状況が続いているところです。これは小学校、中学校も同様で、多くの学校が一旦休校に入り、そして再開という状況となっております。

ちょっとゆったり感があった１１月１２月から、本当に急転直下で、全国同様のより緊張感を持った対応、場合によっては全県で分散、分割授業を実施し、学習形態も変えなければいけませんし、部活動も今は制限をどんどん加えて、接触プレーを中止するとか、練習試合は一切禁止にして、それから活動日の制限、時間の制限等確認しているところなので、なんとか子どもたちのやりたい気持ちを大事にしながら、今後可能な限りの教育活動の継続を心がけていきたいと思っております。

前回は１２月２０日が教育委員会でしたが、それ以降ということで、１２月２３日に優良ＰＴＡで文部科学大臣表彰を受けられました三朝中学校のＰＴＡ会長さん、それから校長先生と教育長さんも私のところにお見えいただいて、報告をいただきました。三朝中学校は全員参加型の活動を推奨されていて、このコロナにあってもとにかく活動を継続しようということで、行事に学校ぐるみで、ＰＴＡぐるみで参画をされるような計画を立てられたり、それも親子で参加するというふうな、本当に地域に根ざした活動が評価されて、この度文科大臣表彰を受賞されました。その報告を受けたところです。

そして１２月２４日、これも嬉しい報告で、奈良県でありました全国高校生歴史フォーラム、いわゆる地歴甲子園といっていますが、青谷高校の課題研究の発表が優秀賞を受賞されて、この報告に来られました。青谷上寺地遺跡から出土した土器に着いた黒い斑点、これがどんな経緯で出来たのかを、実際土器を作ってそして２４時間焼いてみてというふうな体験型の課題研究をされたということが非常に評価され、更にはプレゼン力が非常によかったと、ここが評価の高かったところで、私のところでも生徒さんが、堂々と「こういうふうにしてやりました」ということを報告いただいた、非常に嬉しい成果報告をしてくれました。応募総数８８件の中から、奈良県知事賞という栄誉ある賞ををいただいたところで、こうした経験が本当に今後に生きる自信になるんじゃないかなというふうに思っております。

同じ日に、公立鳥取環境大学との意見交換会を行って、高校生を対象とした講座で、高校での探究学習と大学の研究サイトを結びつけるような仕組を今教育総務課のほうで作ってもらっています。そこに１５分とか短い内容で、大学研究の内容を入れ込む。それを高校の探究学習の中で、関係のある分野、関心のある分野にすぐにアクセスできて、大学研究にも繋げられる。そういう意味で「ふるさとキャリア教育」の高校から大学まで、地元大学、これは環境大学だけじゃなくて、鳥取大学、それから鳥取短期大学、看護大学も含めて、そういうふうなサイトを今構築中で、非常におもしろい発信になるんじゃないかなと思っていますので、またいつかのタイミングで委員の皆様方にもご紹介したいなという

ふうに思っています。そうした内容や、あとは県内入学者の確保に向けた取組、教員養成に向けた取組等を意見交換させていただいたところです。

そして、１２月２５日、東京芸大ワークショップを行いました。東京芸大のＯＧの方４名にお越しいただいて、まず２５日、鳥取東高校でフルート等の楽器演奏の指導を直接高校生たちが受けました。翌２６日は、鳥取空港での合同のワークショップとして演奏会を計画してたんですが、なんとこの日は大雪警報で、高校生が来れなくなって、そのＯＧ４名の方のミニコンサートを１時間余りしていただきました。本物に触れるという非常に貴重な体験が出来たんじゃないかなというふうに思っております。是非生徒たちにも聞かせたかった。本年度で第３回目になる取組で、来年もまた継続して取組を進めていけたらなというふうに思っているところです。

年が明けまして、１月７日に町村教育長会をオンラインで開催をいたしました。教職員の確保あるいは加配教員の確保、３０人少人数学級の導入に向けてのご意見を伺いました。３０人学級の恩恵は都市部の大きな学校は出るんですが、中山間地にある小さな学校は、もう既に２０人下回っているとかでなかなか無いわけで、逆にそうした町村の教育長さん方からは、小規模校への加配がなくならないようにとか、支援継続をお願いしたいという声が非常に強かったです。国の動向もにらんでいるところですが、今まで配られていた加配を削って３５人学級に組み込んでいこうということでは、これでは困るわけで、定数改善にもならないので、その辺りもにらみながらも、本県は４月からは３０人学級に踏み込んでいくつもりでおります。明日知事会見でそのことを表明され、翌週２４日に町村長会議がございますので、そこで私のほうから再提案をして、その方向性の了解を得るというふうな動きになっております。もう１点声が多かったのは、障がいのあるお子さんが年々増えている、この対応に苦慮している、このことも含めてやっぱり人が要る。そういう声が各市町村の教育長さん方から多く聞かれたところであり、これも重点をおいて取り組んでいく必要があると思っております。

そして、資料には書いておりませんが、１月１５日、１６日に２回目となる大学入学共通テストが実施されました。東京では痛ましい事件が起こったり、あるいは２日目には津波警報で大騒ぎになるとか大変な状況でしたが、本県は特に影響はなく、無事受験生は力を発揮してくれたんじゃないかなというふうに思っております。これからいよいよ今度は二次試験に向けてチャレンジということになります。

そして昨日ですが、山陰教師教育コンソーシアム連携協力推進協議会をオンラインで行いました。久しぶりに島根へ行って開催予定にしていたんですが、全然行けなくなってしまいましてオンラインに切り替えて行いました。教員養成研修の現状と課題であるとか、１回報告しました附属学校を活用した山陰教員研修センター、ここでの学び、今日の日本海新聞にもその状況が取り上げてありましたが、そこでやはり子どもたちを実際に目の前にした先生方の学びの場として、有効に機能していくんじゃないかなと思っております。その辺りの研修等についての話を昨日行ったところであります。私からの一般報告は以上

でございます。

４　議事

〇足羽教育長

　続いて議事に入ります。本日の議事録署名委員は、若原委員と森委員にお願いします。

（１）報告事項

〇足羽教育長

　報告事項について、項目ごとに説明及び質疑をお願いしたいと思います。まず、報告事項アについて説明してください。

【報告事項ア】国際バカロレア教育の導入について

〇酒井高等学校課長

　はい、高等学校課酒井です。今年もよろしくお願いいたします。国際バカロレア教育の導入について報告いたします。倉吉東高校に国際バカロレア教育を導入するということで、令和４年度に認定校になるよう、それを目標に現在必要な人材育成、教育課程の検討、施設設備の整備等を進めているところでございます。

　１にこれまでの取組ということで、今年度の取組を書かせていただきました。倉吉東高校では、校内に国際バカロレアＩＢ導入委員会を設置しまして、月１回会を持っております。この会議は教育委員会からも指導主事等を派遣して情報を共有しているところです。そして、倉吉東高校ＰＴＡにも広報しておりまして、ＰＴＡと合同の校内研修等も行っているところです。県の教育委員会としては、１０月にオンラインでバカロレアの説明会を行いました。４０人余り参加いただきました。１１月には補正予算で特に施設の改修の整備費のところで３５００万円余り準備費をいただいて、整備にも取りかかり始めたところでございます。

　今後のスケジュールです。今年度は、この認定校の申請書類をこの１月に国際バカロレア機構のほうに提出する。ほぼもう出来上がっておりますので、最後教育長のサインをもって、提出したいと考えております。来年度４月当初に英語で授業を行う者、外国人になりますけれど採用したいと、今これを予算要求中でございます。そのほか春頃に国際バカロレア機構の職員が倉吉東高校を訪問しまして、確認訪問というんですが、きちんと教育課程等が出来ているかどうか、施設が出来る見通しがあるかどうかというところを審査します。その審査を受けて、認定されるのであれば夏頃認定ということで、それを受けましてフォーラムを開いてＰＲをしたいと考えております。令和５年度にＩＢの一期生となる生徒が入学するということで、授業そのものは令和６年度に、令和５年度に入学した生徒

が２年生になった時から授業が始まることになります。
　来年度の主な事業内容ですが、今予算要求中ですけど、ＰＲのためのフォーラム開催ですとか、ワークショップ、先進校視察がございます。特に教員の指導力を上げないといけませんので、先進的なＩＢ校での短期研修、バカロレア機構が開催するワークショップへの管理職・ＩＢ教員の参加を行っていきます。このワークショップへ参加すると、バカロレアを教えてもいいですよという資格が取れます。３日間の短期集中型のワークショップです。国内外の認定校への視察、実際昨年度も今年度も予算要求して通っていまして、先進校の短期研修ですとか、国外とか国内のＩＢ認定校への視察とかは、コロナで行けていなくてオンラインで行ったりするんですけど、やっぱり実際行ってみて、生徒と触れ合ってという機会をなんとか始まるまでにはつくりたいと考えておりまして、来年度計画しているところでございます。簡単ですが以上になります。

〇足羽教育長
　経過報告ということで、導入に向けての動きを報告いただきました。委員さん方のほうからいかがでしょうか。ご質問等があればお願いいたします。

〇若原委員
　イメージがもうちょっとよくつかめてないんですが、倉吉東高校は普通科ですよね。普通科の生徒で、バカロレアを希望する生徒用のコースかなんかが出来るんですか。

〇酒井高等学校課長
　そうですね。授業の展開が変わるということで、コースまではいきませんけれど、バカロレアを希望する生徒を １ 年に２０名ばかり募集しまして、その１年次、放課後とか長期休業を使ってバカロレアの模擬授業をやってみたりとか、そういうところで「それだったら論文なんかも挑戦してみよう」とか、「英語の授業にも挑戦してみよう」という生徒を集めまして、最大でも２０名で、その２０名が２年生になってから、バカロレアコースでバカロレアの授業を受けていって進路を決めていくという流れです。

〇若原委員
　そのバカロレアコースかなにか、その修了したという認定は試験か何かあるんですか。

〇酒井高等学校課長
　そうです。この生徒が３年生になった時の１１月に、全世界同じ日に試験がありまして、その試験を受けて合格したらグレードが出るんですけど、何点で合格とか、「あなたはバカロレアの授業を受けて、これだけのスコア取りました」というようなのが返ってきます。実際そのバカロレアの授業を履修することによって、日本の高校の授業を履修したことに

読み替えることができますので、バカロレアを希望した生徒は日本の高等学校の卒業資格とプラスして、合格すればバカロレアの資格が取れるということになります。

○若原委員
　ダブル卒業資格ということですか。

○酒井高等学校課長
　このバカロレアでかなり高いスコアを取ることができましたら、国外の大学に進めます。国内の大学でも医学部を含めてバカロレア入試というのを始めてますので、そういうところの入試で将来を決めていくということになります。

○中島委員
　令和６年度、２年生になってから実質的に始まるということなんですけど、これは要するにＩＢの学びがとにかく２年生から始まるということなんですか。

○酒井高等学校課長
　ＩＢの授業が２年生から始まります。なので倉吉東高校の２年生では、文系にいく生徒、理系にいく生徒、ＩＢにいく生徒に分かれます。

○中島委員
　注目は集まりますよね。

○酒井高等学校課長
　今週もＮＨＫで放送されましたし、日本海側では始めてです。実際公立高校の進学校にＩＢを導入しているところはございませんので。

○中島委員
　けっこう時間をかけて議論されましたよね、そもそものきっかけからすると、もうどのぐらいになるんだろう。３年ぐらいかなあ。

○足羽教育長
　１年目ぐらいは人的な部分で、「英語で数学を教えられる人がいるだろうか」ということから、設備に大方１億円かかるし、毎年上納金を投じないといけないとか、そういうハードルのほうが高かったんですが、周りの声は県議会も含めて、「やれ、やれ。そんなとがった高校を、やっぱりつくらないといけない」という声が多くて、常任委員会なんかでの報告でも。実際問題、教員が付かないので、文系、理系の今のコースに加えて、ここの

教員は国は見てくれない、推奨しながらも。これを自前でやるという必要性が出てくる。この支援教員たちがさっきあった資格取得に向かわないとといけない。誰でも教えられるというわけではないんです。そういうことがありますので、そういう意味では継続的にある一定の投資は必要になるが、先程言ったように日本海側では初、公立高校ではまだ珍しいです。

〇若原委員

当初は、バカロレア校に認定される条件が非常に高かったんで、全教科英語で実施しないといけないとかね。当初はインターナショナルスクールのようなところでないと無理だろうと言われていたのが、条件が緩和されたので、倉吉東も参入しようという気運が盛り上がったように思うんです。

〇酒井高等学校課長

おっしゃるとおりです。それと今まではバカロレアは、ある一部のところをすごく深く掘っていきますので、歴史にしても全てを網羅的に古代から現代までやるわけではなく、テーマとしてイスラムならイスラムのこの時期を深くやる。そうすると今までは、やらなかったところは日本の高校の卒業資格を取るには、別に補充してください、更に授業をしてくださいということだったんですけど、文科省はそこを無くしましたので、バカロレアの歴史を取れば、もう世界史とか日本史は受講したことにします。読み替えができるということで、そういうところが減ってきていますので、確かに文部科学省も奨励するだけのことはあってその辺りの負担は削減しています。いわゆる完全な探究的な学びですので、この倉吉東高校の取組をどうやって全県的に広げていくか、いい部分を他の学校にも広げていくかというところが、これからの鍵になってくるんじゃないかと思います。

〇中島委員

改めて倉吉東高校の狙いと、県教委の狙いというところを教えていただいてもいいでしょうか。

〇酒井高等学校課長

基本的には倉吉東高校は探究する人、とにかく自分で主体的に学ぶ人、これをどうしてつくっていこうかということ、これをずっとこの何年も考えてこられて、そこの方向性と世界が認めている国際バカロレアの方向性が本当に同じだということであれば、国際バカロレアの資格を取ることが、生徒の進路選択を更に広げることになる。その影響はバカロレアを取らない他の生徒にも及ぶことになる。そういうことから、是非とも倉吉東高校に導入したいという考えでございます。

それで教育委員会としては今探究的な学びということを言っておりまして、特に地元の

何かを題材として、そこから自分で考えて何か課題を設定してという、こういう学びをどんどん広げたいと。そこと国際バカロレアの考え方とは一致していますので、そのノウハウを先程言いましたように、何とか広げたい。今日の新聞にも出てました鳥取西高校の「スナヤツメの砂泥中行動」の研究はついにアメリカでの発表会に行くことが決定したみたいですけど、あれも結局理科の先生が、身近なところの題材を生徒が発見してきて、それを大切に温めながら何年もかけてこの研究をやっていますので、そういうところがどんどん出てくれば、ＳＳＨの米子東高校もジョウビタキの繁殖の研究で文部科学大臣賞を取ってますけど、そういう生徒を学校のプログラムの中で育成していける。それが普通科の魅力にも繋がっていきますし、いわゆる偏差値で大学を決めるのではなくて、学びたいことで大学を決めていくような主体的な生徒が育っていくんではないかと考えております。この国際バカロレアと共に進めていきたいと思っております。

〇中島委員

リーディングケースがどんどん出来てくるということは私も全然いいことだと思います、まずは。ただ若干危惧するのが、県立高校がいろいろ種類がある中での倉吉東高校への投資ということと、他の学校とのバランスということに関して、批判が出るということはないのかなということをちょっと感じるんですがどうですか。

〇酒井高等学校課長

他の学校も今すべての学校で魅力化を進めておりまして、例えば倉吉農業高校は生徒数は少ないですけど、スマート農業ということで何年もずっと支援しておりますし、境港総合技術高校の実習船、今建造に向けて動き始めていますけれど、これはもう何億という話でなくて何十億というような話で、そういうところもございますので、特に倉吉東高校のバカロレアがすごく突出しているわけではありません。

〇若原委員

バカロレアは認定校になるだけで社会的評価も高くなると思いますし、その高校には成功してほしいんですが、２０人の生徒が本当に集まるのか、そしてその生徒のうち何人が最終的な修了試験にパスしてくれるのか、その成果が一番気になるところですね。

〇酒井高等学校課長

ありがとうございます。私どもは最初は数名からでもいいというふうに正直考えています、１０名いかなくても。他県に聞いてみましても、最初の年は２０名といいながら６名でしたとか、なかなか集まらなかったという話も聞いています。

〇足羽教育長

見えないということがあると思うんですよ。「なにをしていくの？どうしていくの？」という不安がやっぱり中学生にきっとあるんだろうなと思います。実際に先輩が出はじめると、「こんなふうなんだ」とイメージがわいて、中学校サイドに広がっていくと、志望者がそれから出てくる。自分が本当に課題を見つけて、自分で研究して飛び回ってという学習の魅力が伝わっていくようになるきっかけ、そういう意味でも一期生が大事なんだろうと思います。

○酒井高等学校課長
倉吉東高はそのために２年生から始めるんです。１年生の時にしっかり説明すると２０人は集まると言っておられます。

○若原委員
途中で脱落しないように、最後まで頑張ってほしいですね。

○森委員
募集は倉吉エリアの学生さんですか。

○酒井高等学校課長
鳥取県は全県１区です。どこからでも来られますし、例えば島根県の生徒が鳥取県に住所を移せば受験可能です。滋賀県の虎姫高校には周りの福井県などから問合せがあったそうですけど、県外は取らないということです。でも、鳥取県は県外から来てもらってもいい。ただ住むところは自分で探すか、倉吉北高校の寮であれば県立高校と協定を結んでいますので、お借りすることができます。

○中島委員
全くの杞憂かもしれませんけれど、この確認訪問が春頃に予定されていることで、ちょっと前ですけど、ユネスコが認定するジオパークの方から伺ったんですけど、ジオパークに認定するかどうかについての物差しを向こうが持っている。ユネスコが持っているので、感覚的にはいいなりにならざるを得ない感があって、感覚的に少し苦しいところがあるという話を聞いたんですね。このＩＢ機構職員による確認訪問というのも、もちろん提起される向こうのスタンダードに合わせないといけないということは基本だとは思うんですけど、そこのところでなにかしらこちらの主体性が無くなるというようなことがあるとどうなのかなと、今ちょっとこれを見た時に思ったものですから、この辺どんなコミュニケーションになるんですか。

○酒井高等学校課長

多分その心配は要らないんじゃないかと思います。と申しますのは、倉吉東高校は候補校なんですけど、この候補校になった段階で、既にバカロレアの認定を受けている学校の先生の中のグレードの高い先生がコンサルタントとして倉吉東高校に入っていただいています。その先生とずっとコミュニケーションしながら、ベースの部分はこれでいいというのをもらってから、認定訪問になります。そのあとの物差しは、実はバカロレアは生徒とそれを教える教員に物差しがあるようなイメージです。よりいい環境で、どうやったら学びが深まるか、なので逆に我々県教育委員会が突きつけられていまして、「教育環境をよくしてあげなさい」と。例えば机１つ取っても学習に適した机、あと図書館の配置にしても、図書館の本を自由に生徒が選んで、いろんなところに検索が出来て、例えばＩＣＴの環境なんかもつけるのが当然望ましいということは言ってこられます。視点がとにかく学ぶ生徒の視点で、いろんなことを考える。それをあとは教える先生が教えやすいようにサポートしてくださいということを強く言われます。

〇佐伯委員

教える人が必要かなと思って、その方たちをかなり集めてこないといけないなと思ったんですが、でも子どもが何人集まるかわからないですよね。令和６年度から始まるにしても、教える教員は、ＩＢコースだけの先生なのか、そうではなく理数系なんかのクラスのほうにも関わられるのかということや、それがもし無理だとしても、校内の教師集団の授業力をアップしていくことには寄与していただけるのかなとか、その辺りを思ったんですが。

〇酒井高等学校課長

そこの部分が最初に教育長が申したとおりでして、結局バカロレアでコースを作っても、国から教員が取れるわけでもなく、中にいるメンバーでやるしかないということで、その辺りの調整を今学校としているところでございます。バカロレアを教える教員がバカロレアだけを教えるということでは回りませんので、バカロレアを教える先生も一部他の生徒を教える授業にも出るというのが理想的な形だと思っています。なので、このワークショップ自体は３日間で、最低限教える資格を取るにはそこまでハードルは高くないです。ただやはり教え方が全く違いますので、当然教員集めにチャレンジが要ることになるんじゃないかと思います。なるべく多くの先生方にこのワークショップに参加していただいて、資格はあるけどバカロレアの授業には出ていないというような先生も増やしていきたいなと考えております。

〇若原委員

さっきの認定校の申請のところですけども、事前にバカロレアの本部かどこかに、相談にいっておられるんでしょうね。例えば大学で学科を作る時には、文科省に何回も事前に

相談にいくわけですがね。

〇酒井高等学校課長
　おっしゃるとおりでして、コンサルタントという人との間で、書類を書いて出したりする。去年の夏ぐらいにその事前確認というので終わってまして、コンサルタントのほうから、もう申請されても大丈夫ですよという確認はいただいています。ただこの辺りに懸念があるので、その辺りを詰めてから申請してくださいということで助言をいただいています。このコンサルタントという人を通じて、国際バカロレアの本部へ提出することになります。

〇足羽教育長
　ではよろしいでしょうか。それでは次に進めて参りたいと思います。

【報告事項イ】先進実施校における１人１台端末の活用状況について
〇足羽教育長
　では、続きまして、先進実施校における１人１台端末の活用状況についてお願いします。

〇酒井高等学校課長
　失礼します。高等学校課酒井です。引き続きお願いします。先進実施校における１人１台端末の活用状況について、いよいよ来年度から高校全日制課程は１人１台端末ということになります。それを見据えて本年度には、鳥取商業高校、倉吉東高校、米子東高校の３校で、先行して１人１台端末を導入しました。今１年生がすべて１人１台端末で学びを進めています。その状況について報告いたします。
　令和４年度入学生からＢＹＡＤによる１人１台端末実施と書いてあります。大学では普通ＢＹＯＤ、自分自身のデバイスを持っていくというような形ですけど、そうしますとセキュリティーを強化するシステムがないと、生徒が自由に使い過ぎてお金がかさむとか、いろんな問題が発生しますので、保護者のほうからも管理ツールをきちんと導入しておいてほしいという声もありました。そのために学校のほうで機種を選んでＢＹＡＤという形で１人１台端末を予定しております。生徒はこの端末を毎日持ち帰って、課題等家庭学習でも活用します。充電は家でして学校に持ってきます。低所得者世帯に対しては、県のほうから貸与するという形を取りたいと考えています。ＢＹＡＤで行う際にＧｏｏｇｌｅ社と連携しておりまして、各種のアプリを中心に進めているところでございます。
　生徒の端末の活用状況につきまして、そこの教科別に書いているのがわかりやすいと思いますが、例えば英語ですとフォームズを使った相互評価と書きました。フォームズというのはアンケートや小テストが出来るアプリです。そういうアプリを使って相互評価を行

う。あるいは英語で文章を作成してメールでＡＬＴの先生とやり取りする。こういう使用をしております。理科ではスプレッドシートを使ったデータ分析、スプレッドシートというのはエクセルのことです。Ｇｏｏｇｌｅではスプレッドシートといいます。そういうのでデータ分析をしたり、地理ではＧｏｏｇｌｅＥａｒｔｈを使った授業を展開したり、保健体育ではマット運動やバスケットボールで生徒のフォームの動作を動画で撮影してそれを見る。そういう形で使っています。具体的にはその下のほうのＱＲコードを後ほどスマホで読み取っていただきますと、鳥取商業高校が体育でどうやって使っているかとか、倉吉東高校は国語総合の授業がどうなっているかというのが見ることができますので、スマホでご覧いただければと思います。

２頁をご覧ください。教員による端末の活用状況、活用推進について、やはり教員の指導力というのが、先行実施して、非常に重要だなということを改めて感じておりまして、３校ともＩＣＴ活用推進の校内組織をまず作っています。この校内組織を元に、学校オリジナルの研修を行っていただいております。この学校オリジナルの研修だけでなく、当然、県教育委員会の主催の研修ですとか、Ｇｏｏｇｌｅ社が行う研修にも参加していただいております。

成果としましては、生徒の意見を吸い上げるアウトプット重視の参加型授業スタイルに変わりつつあるというところが１つ。もう１つは操作に慣れてきた生徒が、自発的に数人のグループをつくって、このＧｏｏｇｌｅのクラスルームというところで、学校から配信された課題をその４人ぐらいのグループで時間を決めて解き合ったり、そういう時間をつくったりする様子が見て取れるようになったという報告があったり、あと配布資料のペーパーレス化や、あるいはアンケートの作成は容易にできますので、健康観察なんかも全てこのフォームズのアンケートを使って体温等も入れています。そうすると担任の先生が生徒の健康状態がわかるようになっています。

課題です。１つはやっぱり長時間使うことによる健康被害あるいは情報モラルが懸念されるということで、解決策として、やはり健康被害については、生徒保護者に周知する取組を充実させる必要がありますし、情報モラルもその対応充実を図っていきたいと考えております。教員の活用推進につきましては、教員間、学校間で意識に差があるという辺りはまだありますので、教育センターやＧｏｏｇｌｅから提供されている研修、これも充実を図っていきたいと考えております。

あと最後にＩＣＴ環境の整備です。今教室にはアクセスポイントがあって自由にネットが使えるんですけど、教務室を始めまだまだ使えない箇所が多く残っております。この辺りも順次整備していきたいと考えておりますが、予算が無限にあるわけではございません。ただＩＣＴの環境というのはそもそも便利さをどんどん追究していくものですので、１回便利になると、もう不便でいらいらするということがありますので、学校からの要望にひとつひとつ応えていく必要があると考えております。本日お配りしましたチラシを、この３校以外の学校は来年度から始まりますので、中学生に配って、ＩＣＴで学びが変わりま

すよということをお知らせしたいと思います。後ろのほうにまたＱＲコードを作っておりまして、ここを保護者の方にかざしてもらうと、授業なんかを見ることができます。
　あと、よくある質問です。この３校での先行した取組からわかってきた例を載せております。簡単ですけど以上です。

○足羽教育長
　以上ＱＲコードから実際の場面の様子を見ていただくと、よりわかっていただけるのではないかなと思いました。いかがでしょうか。

○若原委員
　低所得者世帯への支援のことがちょっと出ていますけれども、保護者の負担金額はどのぐらいになりますか。

○酒井高等学校課長
　５万弱でなんとか。保険なども含めてですね。

○中島委員
　これは専用サイトとかで購入するということになっているんですけども、安くなるんですか。大量購入によるメリットとか。

○酒井高等学校課長
　はい、少し出ています。

○中島委員
　どれぐらい出るんですか。というのがもちろん、ＢＹＡＤにするメリットというのは当然あるという前提の中で、これから全県展開を順次していくんですよね。そうすると一気に増えていくという中で、なんで指定したものをこの形で買わなくてはいけないんだということを言われる人というのは、一定程度出てくるんじゃないかなと思うんです。その場合に具体的にもちろんメリットも説明しつつ、管理的なことも説明しつつ、価格的なことというのも大量購入によって、こういうメリットがあるんですということを具体的な数字を挙げて説明していくということも、必要なんじゃないかなというふうに思います。

○酒井高等学校課長
　ありがとうございます。その辺りもちょっと踏まえて説明はしていきたいと思います。

○佐伯委員

これ購入するのに５万円で、それ以外のお金はまだたくさんかかるんですね、入学時には。小中は今のところは無償で子どもたちが使っているので、この端末に対する抵抗感とかは全くないし、使うのが当たり前だという感覚になっているんだと思うんですけども、保護者負担の部分は、義務教育じゃないというところで、非常に大きなギャップがあるんだろうなと思うので、できるだけ早い時から情報提供しながら、そういう費用がかかるんだということを知っていただきたいですね。そういう情報が本当に必要な人になかなか届かないという現状があって、その時その時だけの生活に負われている方もたくさんいらっしゃるので。貸与じゃなくて全員が購入になるんですか。

○酒井高等学校課長
はい。

○佐伯委員
少しずつ払っていくなんてことは無理なんですね。

○酒井高等学校課長
払い方については、分割はできるように調整は今しているところです。

○佐伯委員
その辺のところの救済制度のような、進学時に補助金が出るところがあるとか、いろいろなところの情報を取りまとめたものが、福祉関係のほうから特に１人親家庭のところに情報がきちんと届くようなことを考えておく必要はあるんだろうなと思いました。

○酒井高等学校課長
ありがとうございます。これで中学生に配るのは２回目になります。全国的にもだいたい半分ぐらいの県はＢＹＡＤで自己負担で買うという流れになってまして、ただ先程申しました低所得者への配慮はきちんと県のほうでも考えていただきたいと思っております。小中学校で使い慣れても、高校３年間だけ全然触れないというわけにはいかないんじゃないかというふうに考えておりまして、お願いしたいと思います。

○中島委員
考え方はいいんだと思うんですよね。義務教育じゃないんだから基本的には自費負担だし、今の時代の中でこういうものを皆に使ってもらうということで、いわゆるデジタルデバイドというか、デジタルが苦手な人を減らすという意味でも、それは全然いいんだと思うんですね。ただ、コロナのいろんな状況の中で、払う必要もわかるんだけれども、なかなか大変だという人が出てくるということも確かだとは思うので、いろいろなかたちでち

ゃんと伝えつつ、今佐伯委員もおっしゃったように、分割とかそんなようなことも可能な限り考えてみていただくということでお願いできたらなと思います。

○酒井高等学校課長
　ありがとうございます。ご意見のとおりしていきたいと思います。やがて何年か後にはなるんですけど、やはりＢＹＯＤの方法でなるのが一番自然だと。小学校の時から自分のデバイスを持っていて、それが非常に使いやすくて、ということだといいんですけども、例えば今それをすると、学校も対応できなくて、ここの動きが悪くなった時に何が原因かもちょっと突き止めることができませんし、授業が止まってしまうようではいけませんので、今は同じ機器にさせていただいています。

○佐伯委員
　各町村の福祉部局のほうとかは、すごく困り感を持っておられる方の状況もよく知っていらっしゃるので、県のほうもそちらと協力しながら進めてもらいたいと思います。わりと教育関係者はよく知っていることでも、福祉の方はこういう動きをあまりわからない場合があるので、その辺を情報提供もしていただいておくと、前もってスムーズに「こんなふうな時にお金がこんなふうにかかるから、このお金の使い方はこうしようね」みたいな指導が具体的にできますので。子ども自身が困らずに、皆と同じようなものが手に入るという状況にしてあげたいなと思うので、その辺をちょっとお願いしたいなと思います。

○酒井高等学校課長
　ありがとうございます。ちょっと福祉のほうとも連絡を取り合いたいと思います。

○若原委員
　端末の機種を何を使うかというのは都道府県によって違うんでしょうか。

○酒井高等学校課長
　違うと思います。

○若原委員
　端末のメーカーのほうからの寄付とか支援とかそういうものはないんでしょうか。

○酒井高等学校課長
　鳥取県はＧｏｏｇｌｅ社と提携していますので、Ｇｏｏｇｌｅ社の研修とか、そういうのを受けたりはできるようになっています。

○足羽教育長

一企業と癒着するわけにはいきませんので、簡単にはもらうわけにはなりませんが、お借りしてそれを研修機材にしてもらったり、先程もありました教員の指導には何回も入ってもらい、担当者の方に来てもらって、教員のレベルに応じた研修なんかにも関わってもらったりとかしています。国のほうにもこれは要望しております。ほぼ義務教育化されている高校まできちんと保障すべきという国要望もしております。ただ、国のほうは義務教育ではないでしょうというところで切っていますので。でも、コロナ禍で家庭の困り感は大変な部分がありますから、例えば１万円でも１万５千円でも安くなれば、それにこしたことはない。そういう努力は国のほうへの要望も含めて今後も継続して参りたいと思います。またやっぱり小中も一緒ですけど、今日報告いただいたんですが、学習の中身をこれを使ってどう高めるかというところが、これから大事なところです。使い勝手は子どもたちのほうが早いです。先生方のほうが追いつかないような状況がありますから、いかに学習の中で効果的に使うかということがやっぱり今後大事になるかなと思っています。

○酒井高等学校課長

使用するとそのデータが全てＧｏｏｇｌｅＤｒｉｖｅというところに保存されていくみたいなんですけど、令和２年１０月に県立高校で溜まったのが４１１ギガバイトとすごく少なかったみたいなんですけど、令和３年１０月、１年経って今が６５テラバイト、一気にこの１年で溜まっていっているものも増えているということなので、着実に使用はされているという状況です。

○森委員

この端末を入れることで、何か削減できる部分、例えば教科書の紙問題ですとか、これが入ることで削減できるものがあるかというのも、皆さんへ説明する時の１つのアイテムとしては、今の環境問題を含めてもちょっとあったらいいなあと思いました。

それから、寄付とかの集め方として、ふるさと納税的なものを使う方法がなにか無いかなあとか、ちょっと思ったりしました。なので、収入と経費の削減とというところで、これが入ることで、そういったところもあれば、これが加わったことでのプラスの部分になるのかなというふうにちょっと思ったりしました。

○酒井高等学校課長

ありがとうございます。ちょっとまた、ふるさと納税なんかも勉強させてください。削減は全ての学校ではないんですけど、今まで電子辞書とか買ってたいところは、もうアプリでもっともっと安い値段でこれに付いているものがありますので、かなりその部分は削減できます。２万円する電子辞書を買わせている学校もあったわけですので、それは買わなくてよくなりましたので、その部分が削減できるんではないかなと思っています。

あと、このコロナ後について、いろんなものを変えていかないといけない。その活用を見据えたことを考えていく時に、今まで当たり前にやっていたことでも、もうやめてしまってもいいものはないか、そういうところをしっかりと今の期間に考えていただきたいということは学校には投げかけています。それと紙の問題とかも含めてということですので、たしかにそういうところも考えながらと思います。

〇足羽教育長

広い目で見れば、おっしゃった紙なんか、アンケートはこれまで紙で印刷にかけていましたが、これが無くなるわけだから印刷費用も要らない。紙も要らない。それが個人で長いスパンで見た時に、何円削減になっているとかそういうことも見えてくるかなと思いますし、電子辞書に２万円もかけなくてもいい。学習の用具として使う意味で、それまで別教材を投じていた部分を要らなくするという意味で５万円が全部出るとは思いませんけれども、２万円削減できる部分があって、逆にそれがあるからこそ、今まで出来なかった三次元的な学習だったり、今すぐ地震がどこでどんな状況になっているなんてことが、さっとその場で皆で共有できたりとか、今まで出来なかったことができる。そういうプラス面もどんどん出していかないといけないので、さっきのような資料を元に発信していけるかなと思います。

〇森委員

企業の中では今、紙問題、ホッチキスのピンの問題、それからクリアファイルの問題、ペットボトルの問題、電気のＣＯ２の問題あたりは注目を集めています。企業や生活での電力の使用量を半分にできないかということをやはり声高に、これは大企業が先に進めているんですけども、そういったことが出来ていないと、いくら素晴らしい技術を持っている会社でも、「取引はしませんよ」と言われる時代に入ってきているので。そうなってくると、私たちの事業、商業的な部分でも、そこが非常に問われるところになってきていて、ＩＳＯの取得というのが非常に叫ばれた時代があったと思うんですけれど、今はその次のステップで、環境配慮ができていない企業、目線が無い企業はとても大手と取引きできなくなるという現状が目の前に来ているんですね。それを考えると今のこういったことの中のメリットの中に、環境問題ですとか、ＳＤＧｓ的な要素というのは、費用の面だけでなく、そういったことをかなり色濃く入れていくことのほうが、説得力というか、価値としては非常に高くなるんではないかなというふうに思います。

〇鱸委員

１つ別の問題なんですが、今こうやって小中高と継続するＩＣＴ活用、デジタルを中心とした授業、探究授業の中で育った子どもの成果を、大学が入試の時に評価していく、そのところの今起こっている大学のほうから見た変化というのは例えば、島根大学、鳥取環

境大学、鳥取大学、その辺の関わりの中でなにかお話がありますか。

〇酒井高等学校課長

最初に教育長が話した鳥取県全体の大学なんですけど、今大学のほうに探究的な学びについての動画をつくっていただいています。それを高校生が１人１台ですから、自由に見られるので、そこには動画に出てくる大学の先生の名前も出てきますし、アドレスとかも出てきます。そうすると生徒が大学の先生と直接繋がる。メールとか、メッセージとかで質問したり、そういうようなダイナミックな動きができるということで、今県内の大学との連携を深めているところでございますし、ＳＳＨの高校では、グローバルサイエンスキャンパスをやってます。こういうところとほとんどＩＣＴを使ったやり取りでどんどん活用が進んでいて、大学が求めている学びを高校時代の日頃の授業の中でつくっていく。そして生涯に渡って学び続ける。そういう人材を育てていくことにも繋がっていくのかなと考えております。

〇鱸委員

具体的に接続の段階で、入試による選択方法というか、試験をするにしても試験の内容が少し変わらないといけないだろうなとか思うんですが、入試に関してはどういうふうに。

〇酒井高等学校課長

まだ今回の大学共通テストが終わったばかりで、私自身も全部分析してはいませんけれど、私は地歴なんですけど、去年の入試以上に考えさせる思考問題が増え、かなり平均点が下がりました。初見の資料を見せて、そこから読み解いて、自分の持っている知識と合わせないと解けないような、そういう問題を歴史とかも今年は出しています。数学がかなり悪かったということですけど、やはりそういう思考問題に近づいていってるのかなと思います。だから大学はいわゆる昔の推薦入試だけでなくて、共通テストも含めて、我々が思っている内容を出しているんじゃないかと思います。

〇足羽教育長

推薦入試やＡＯ入試はまさしく、単に面接をして小論文を書いてじゃなくて、高校時代に何に課題意識を持って、何をやってきたかをプレゼンする。それを大学は採用しますというケースはどんどん増えてきていて、奇抜な発想で「雪国の中でおばあさんがコロを引いていく。これにソリを付けて、雪が降ったらすっと行ける。」なんていう工夫、アイデアをプレゼンしたら、慶応大学合格とかなんていうのもありましたし、このＩＣＴを使い、探究学習でというのはまさしく一般入試も変化してきている中、また一方でそういった自分の課題意識や特色ある学びが大学の門を開く。そんなことにも繋がっていくようになると思うんです。

【報告事項ウ】令和３年度鳥取県体力・運動能力調査及び全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果について

〇足羽教育長

　では、報告事項ウをお願いします。

〇高田体育保健課長

　体育保健課です。よろしくお願いします。報告事項ウということで、令和３年度鳥取県体力・運動能力調査及び全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果につきまして、簡単にご報告申しあげます。

　はぐっていただいて１頁をお願いします。はじめに全国体力・運動能力、運動習慣等調査についてです。こちらは国が実施しているものですけども、調査対象は小学校５年生と中学校２年生で悉皆で調査を行っております。調査の種目につきましては、握力ですとか、上体起こし、反復横跳びなど８種類の実技と、あとは運動習慣等に関する調査を行っています。調査の結果の概要ですが、（２）のところに記載をしていますが、全国と比較をいたしますと、小学５年生では、全国平均を下回っている実技の種目が多く、反対に中学２年生のほうでは全国平均を上回っている種目が多くありました。また、中学２年生の女子につきましては、反復横跳びの成績が全国で１位ということもありまして、合計得点ですと、男女とも全国で１０位以内に入るというような成績となっていました。全国と比較いたしますと、小学５年生では、合計得点では全国の平均を上回っているところはあるんですけど、個別に種目で見ますと、全国平均を下回っている実技の種目が多く、個人の総合判定につきましても、ＡとＢ、これはＡのほうが成績優秀ということなんですが、Ａの割合が低いなど、成績としてはちょっと小学５年生は良かったというふうにはいいがたいのではないかと思っております。反対に中学２年生では、全国平均を上回っている種目がけっこうありましたので、全国と比較ということでは、中学２年生はまずまずの成績だったのかなと考えております。

　（３）の前年度の比較ということで、令和２年度はコロナの関係で調査を行っておりませんので、令和元年度との比較ということで書いております。前年度の比較ですと、個々の実技テストにつきましては、小学５年生では一部の種目を除き記録ですとか全国順位というのは、大幅に低下をしている状況にありました。また、反対に中学２年生につきましては、令和元年度と比べまして、全国の順位というのは大幅に上昇しておりますし、記録につきましても、令和元年度を上回った種目が多かったというような結果が出ています。これを踏まえますと、前年度の比較という部分で見ましても、小学５年生は成績が低下しておりますし、中学２年生のほうは上昇しているという結果が出ています。

　はぐっていただきまして２頁をお願いいたします。（５）に児童生徒に対する質問調査

ということで、これはアンケート調査なんですけども、この中では特に運動習慣に関する調査等を行っておりまして、小学５年生では運動する子としない子の二極化の傾向が見られるんですが、中学２年生ではやはり全国と比べても、全体的には運動をやっているというような回答が多かったということになっております。

これらを踏まえまして（７）のところで考察しておりますけれども、まず中学生につきましては、全国順位が大幅に上がっておりますけれども、要因の１つとして、コロナの影響が鳥取県はもしかしたら他の県よりも少なかったのかなということが考えられるんですけども、ちょっとそのことについてはこれから分析していきたいと思っておりますし、中学生の成績はたしかに前年度と比較すると上昇している実技の種目というのは多いんですけども、令和元年度の記録をちょっと見てみますと、令和元年度の記録というのはそもそもこれまでと比べかなり記録が低かったということもあって、令和３年度がぐんと上がったからこれで安心だということではなくて、令和３年度の結果だけではなく、引き続きちょっと中学生の成績についても見ていく必要があるのかなと思っています。あと１つ、これまでシャトルランにつきましてはどの学年とも良かったんですが、この記録が徐々に低下してきている傾向がございます。原因はちょっとよくわからないところはあるんですけども、これについても今後成績を注視していく必要があるかなと思っております。

併せまして小学校につきましては、男女とも全ての項目で少し低下をしてきておりまして、中学校は上がっているのに、なぜ小学校のほうで下がっているのかというのは、これから詳細に分析をしてみないとわからないんですけども、単純にたまたまその学年が低かったのか、それとも小学校全体で体力が低下してきているのかというふうなことにつきましては今後分析等していきたいと思っております。

全国のほうの結果については以上で、次は令和３年度鳥取県体力・運動能力調査の説明をしたいと思います。こちらは県のほうで独自に調査をしているもので、小学校１年生から高校３年生までということで、こちらのほうも悉皆で調査を行っております。調査種目は全国と同じで、握力ですとか、上体起こし、反復横跳びなどの８種類の実技と、同じく運動習慣等に関する調査を併せて行っております。３頁の（２）に簡単に結果の概要を記載しておりますが、全国と比較をしますと、やはり小学校のほうは体力テストの関係で全国平均を下回っている種目が多いということから、ちょっと小学生の体力が低下しているのではないかなというふうに少し考えております。また（３）で前回との比較ということで、これも令和３年度との比較ということになっておりますけれども、こちらのほうでもやはり小学生の体力の合計点が前回を上回ったということが小学校ではなかったんですが、中学校、高校のほうではいくつかの種目のほうでは全国平均を上回っている種目もあったということでございます。併せまして種目別の点数ということで見ますと、やはり小学校におきましては、体力の合計点が全ての学年で過去６年間で最低を記録しており、女子も小学生につきましては同様ということで、全国調査と同様に小学生の体力低下が目立つような結果になっていると思っております。

続きまして教育振興基本計画との関連につきましては、今説明したとおり、小学校のほうでは数値が少し低下をして、中学校につきましては数値が上昇しているというような結果になっております。

はぐっていただきまして最後４頁、調査結果を受けての取組ということで、特に小学生の体力低下が心配されることから、そこに記載しておりますように、また今体育保健課のほうでいろいろ展開しております「遊びの王様ランキング」というのを活用して、運動能力の向上に向けた取組の推進ですとか、今ちょうど学校の中でなかなか難しい部分もあるんですけども、学校全体で体力向上を図るような取組を行っていくとか、学校だけでなく家庭、地域を巻き込んで取組をしていくとか、この度の全国と鳥取県の調査結果を受けまして、今月末に予定をしているんですが、子どもの体力向上支援委員会というのを開催する予定にしておりまして、その中で今回の調査結果の分析ですとか、体力向上に向けた対策の取りまとめというのを行って、各学校に周知をするなど、いろいろ様々な取組を行っていきたいというふうに考えているところでございます。簡単ですが、説明は以上でございます。

〇足羽教育長

いかがでしょうか、何かございますでしょうか。経年でちょっと見てみると、今年の中２は、小学校５年生の時の結果が高いんです。資料でいうと９頁。相対的に運動能力が高かったことは言えるんです。じゃあ今年の５年生は低かった。ここをどう今後課題を解決していくのかということが大事かなと。

〇高田体育保健課長

教育長からありましたけれども、２年前の小学校３年生のところの数値を見ると、成績が少し上がっていないところがあって、もしかしたら単純に年代によっての差なのか、全体的に運動が落ちていて、全体的に体力が落ちてきているのかというのは、また少しこれから分析をしていきたいと思っております。

〇足羽教育長

学年によっての違いは当然あるんだろうけど、それでも総数でいうとけっこうな人数がいるんで、１人２人の得手不得手ではないですよね。

〇若原委員

以前どこかの小学校でスクールミーティングで訪問した時に言ったんですけど、近年統合される小中学校が多いですね。それで通学の歩く距離が増えたとか、あるいは遠方の子どもはスクールバスで来るようになって歩く距離が減ったとか、そういうことが体力に影響しているんじゃないかということを聞いたことがあります。

○高田体育保健課長
　今ここで分析ということではないですけど、たしかにこれまで歩いていたものが、バスになって歩かなくなったということも、もしかしたらかなり体力の向上という点では影響があったのかもしれないです。

○中田教育次長
　統合した学校にも勤務したんですけど、統合する前に、そのことはやっぱり危惧しておられました、学校も保護者も。かなりドア to ドアみたいなことが、スクールバスの配備で。それで昔の小学校に集まって、そこからバスに乗っていくみたいな、そんなやり方に変えようかというような話は出ているみたいなので、心配な要素ではありますし、学校にしても地域の方にしても、かなり「これではいけないなあ」という意識が、どこの統合校も持っておられるんではないかなあというふうに思っておりますので、そのことは徐々に改善されていきつつあるんじゃないかなというふうに感じます。

○中島委員
　大きく変わる時代状況の中で、体力が低下する傾向になるというのは、おそらくある程度やむを得ない部分もあるのかなというところで、それを補正するという部分で、親の意識だったり経済環境であったりという部分が、その補正をかけていくんだろうなと思うんですね。そうした時にやはり気になるのが、低所得のご家庭における健康管理の意識というようなことで言えば、どれぐらいそういうところへ意識が、いろんな意味で余裕を持ってもらって、意識が行き届くのかというようなことが全体の数値にも影響が出てくる部分もあるのかなあと思うんですけども、その経済的な劣勢みたいなところとのクロスで調査するみたいなこととかは出来ないものでしょうか。

○高田体育保健課長
　今のデータでダイレクトにはちょっと出来ないかもしれないんですけども。

○中島委員
　ダイレクトでなくても全然いいんですけど、おそらくそこのところを考えていかないと、この問題というのは、全体に対する啓蒙部分と経済性みたいな、そういうところに対してどういうふうに働きかけていくかという２段構えでいかないと、この長期凋落傾向ということに対して、歯止めをかけるということにはなかなかなっていかないような気がするんですよね。

○佐伯委員

体力と学力というのは相乗効果というか、体が元気で姿勢保持をしっかりして、授業時間に集中できるとかいう部分が関係性があって、本当は学校現場のほうでも両方をきちんとしていこうというみたいな気運がすごくある時もあったんですけども、今コロナの問題が入ってきて、消毒もしないといけないとか、近づいてはいけませんとか、マスクしましょうとか言って、いろいろ制約が多い中で、それでまた英語も入ってきて、学習もＩＣＴを使うために先生方も一生懸命研修していく中で、どこに重点を置くというその辺がぐらついているところがあると思います。

基本はやっぱり元気でないと、いろんなことに取り組めないのだから、そのための体力というところを子ども自身が自分でも意識しないといけないというような、そういうところをもう一度立ち返るための資料としてはすごく突き突けられているなと思って、見ていても学校によって、グラウンドではマスクを取ってもいいという学校もあるし、家でマスクを外さないようにと言われている子は、マスクを付けたまま走っていたり、そんな中で子どもとしても苦しいので、「じゃあ休憩時間も外に出ずにいようかな」とかみたいなことになってしまうんです。そこのところでちょっとした働きかけみたいなことがないと、実は走ったら気持ちが良かったとか、こんなゲームしたら良かったね、なんてというひと時もあったらいいんだけど、そういう部分が欠落したところが、鳥取県としてはそんなに休業も長くはなかったので、影響はあんまりなかったのではないかと思ったんですけど、実はやっぱりそこのところが今回やっぱり出てきているのかなというのはちょっと危惧します。

だからこの結果を見た時に、それぞれの学校の受けとめが、自分のところの学校として、子どもの体力はどうかなということをもう一度見つめ直してほしいし、朝食の問題もずっと、鳥取県は「早寝、早起き、朝ごはん」というキャッチフレーズが浸透していて、けっこう朝食の摂取率とか、９０％から８０の後半ぐらいでずっととてもいいなと思っていたんですけども、段々と崩れてきているところが現れているので、もう一度現場のほうで、そこのところを基本としての人間の生き方として一番大事な部分だねというところを受けとめていかないとだめだなと、この資料を見て思います。

○鱸委員

人間の成長を考えた時に、単にこういう結果だというふうに考えずに、５年生で低下しているならじゃあその前はどうだったか。必ず連続性の問題ですから、成長という中での。だから真剣に捉える必要があるし、例えば一方で人生百年時代といいながら、実際に臨床で診ていくと、昔と比べてかなりやばいなと、何が百年時代かっていう地域の方のレントゲンを診ているわけです。それを考えたら昔よりも体力は落ちている。

そういうことなどを含めて、このデータをどう説明していくか。もちろん家庭の環境の中で生活に追われているご家庭というのは、それどころではない。お金は無いと子どもにいいものを食べさせてあげられない。ということで子どもがなかなか運動から遠ざかって

いく中で、これも大きな問題なんですが、通常のレベルの経済的な方においても、こういうデータが将来、あるいは今現在どういうことを物語っているかというようなことを、ＰＴＡやご家庭の保護者の方に、説明していく１つの材料であったらいいなあと。

だから子育て王国でこういうことをやってますという以前に、ご家庭の保護者の方に「このデータはこういう意味なんですよ」という説明付けは、あってもいいんじゃないかなという感じはしますね。そのためにはやっぱり学校医なんかを利用して、これをちゃんとＰＴＡの中で説明して、地域の子どもの教育に興味があったり、あるいはそれに課題を持っているお医者さんなんかがいれば、そういう方にＰＴＡの何かの時にお話をしていただくというようなことも非常に大事かなと思います。

○中田教育次長

それぞれの学校保健委員会がありまして、そこには学校医さんや薬剤師さんや栄養士さんも入られていますし、現場としては、各ＰＴＡの子ども会単位の代表さんが１人ずつ入られている会を年に２回か３回持っておられますので、パターンとしては１回目は夏に行われて、健康診断の結果を元にという感じですね。秋口には、今度は体力テストの結果を元にというような感じで話をされたり、もう一個は学校個有の健康課題について協議をされたりという場は持っておられまして、そこで学校医さんにも必ず来ていただくことになっていますので、その話はしていただくことはできるのかなと思っています。ただそれぞれの学校はやっていますので、こういうテーマみたいなことを、例えば体育主任の会の中でこういう結果を元に、こういうことはやっぱり各家庭にも周知できるような指導があると、届きやすいかなと思いますし、年度始めには保健体育主事の研修会もあったりしますので、そういう場でも今回の調査の肝になるところをしっかり伝達してもらいながら、全県に周知できるような取組をしていったらいいのかなと思っております。

○森委員

いまラジオ体操なんかも見直されてきていて、また社会でもう１回取り組もうという気運というか、そういう流れがあるんですね。学校なんかでラジオ体操なんかをうまく取り入れて、朝の時間のどこかで皆でやるとか、皆さん一斉にというのは難しいかもしれないけれど、モデル的な学校で、朝そういうことをやってみてどうだったのかみたいなことなんかもトライしてみたらいいのかなあと。今年は特にオリンピックも始まりますけれども、最後ワールドカップもあったりして、今年はスポーツで始まってスポーツで終わる年なんですね。鳥取国体というのも今の小学３、４、５年生当たりが対象選手になってくるんではないかと思っていましたので、考えると鳥取国体も１つの大きなゴールのポイントとして、運動を鳥取県が推奨していくというような働きかけのタイミングとしては、次の年度辺りは、非常に声がかけやすいのかなと思ったりしていました。

○中田教育次長

私は３年間離れてしまったんですけど、小学校は今も業間休憩で何かをするという学校もあったりして、それぞれの学校で体育に関する取組というのは必要なんじゃないかなと思います。例えばラジオ体操でいいますと、運動会の最初にはラジオ体操をしますので、体育行事の１カ月前にはラジオ体操ををするとか、そんな取組もありますね。まだまだしておられると思うんですけど、学校では知、徳、体の３本柱で、校長先生は教育目標を立てられて、その中になんらかの体育を入れながらやっておられると思います。

○足羽教育長

学力のことはよく取り上げられるものの、体力のほうは、なかなか全国と比較してどうだというふうに取り上げられることは少ないと思うんですが、これだけ少子化が進み、更には家庭に引きこもってしまうような社会状況の中でいくと、委員さんが先程おっしゃった、５年生でどれぐらいの体力が必要というような基準、それがあれば中学生になった時にそれだけ頑丈な体や持久力が得られるという。それはやっぱり佐伯委員がおっしゃったような学習面での粘りだとかということに繋がっていく基礎になる部分だと思うんです。その意味で県教委としてやはり、結果がこうでした、ああでしたというのを話すんじゃなくて、今はそれぞれご意見いただいた部分で、何が課題かポイントを絞って、なぜそれが課題と言えるのか、それは３年後５年後１０年後に、こんな影響をもたらすこと、だからここの部分はこういう取組をしてというポイントを絞った形での発信を、それぞれの研修会や家庭にも発信していくというようなことに役立つ資料かなと思って、細かい個別の数字の上がり下がりじゃなくて、全体として見えてくる課題はこれというのを絞ってということが必要かなと思って聞いておりました。

逆に中島委員さんからあった低所得者との要因的な部分は、これはある学校に聞いてみるといいですね。うちじゃわからないので、例えば城北小学校が持っているそういうデータの中からそういうことが見えてくるかどうか、桜ケ丘中学校でそういうことが見えてこないかとか、なんていうのをちょっと内々で個別に見てもらって、全県的にはちょっと見えないので、ちょっと拾ってみたら、そうした傾向がやっぱりあるかなというのがわかるかもしれません。

○森委員

私たちも肌感ではありますね、大きい校区なので。やっぱり子どもが言いますよね。「クラブに入りたいけど、ぼくんちはお金がないから学校のクラブの月会費千円のところでも入れんもん」と、小学生の子が言ってたりするのを聞いていましたし、ただ、こうやってテレビでオリンピックがあるとか、そういうときにやりたいという気持ちも子どもたちも高まるんですよね。だからこういう時がチャンスなんです。やっぱりここでお金の算段を子どもなりにするんですけども、でもそれはそれなりにいい面もあって、そうやって

今の状況を考えながら、でもこうやってやりたいんだというところもあるので、よく考えて立派な偉い子だなと思って見たんですけど。マイナスばかりではないけども、そういう背景はあります。ユニフォーム１つ、帽子も揃えられなかったりしたり、野球なんかすごく道具がたくさん要るので、全然お金が足りないといながら運営していらっしゃるところもあります。

○足羽教育長
　ちょっと個別に当たれば、見えてくることがあるかもしれないし、今後に向けてそういう工夫もしてみたらどうかなあと思います。

○高田保健体育課長
　では、小学校なり中学校のほうで内々に少しデータをいただいて、そういう実態があるか調査させていただいて、その後どういう対策が取れるのかということを少し検討していきたいと思います。

○足羽教育長
　それこそ福祉の関係でしないといけない部分かもしれないし。
　では、よろしいでしょうか。ありがとうございました。それでは残りの報告事項については時間の関係で、省略したいと思いますがよろしいでしょうか。では以上で報告事項は終わらせていただきます。
　そのほかに各委員さんのほうから何かございますでしょうか。

○鱸委員
　ちょっとお伺いしたいんですが、今コロナで学校の先生も感染したりするケースがありますが、学校のＢＣＰという概念で、何かこういう方針でそろそろいかないといけないなあという何か見通しみたいな、今後教員が少なくなってくる、濃厚接触者になってくる、そういう中で究極にはこうなるよねという話合いはまだないですか。

○林次長
　いわゆる教育活動の内容とかについては、やっぱり制限をかけていただくなり、活動内容そのものの見直しというのはしていかないといけないかなとは思っていますけれど、先生そのものが半分しか出勤できないというところは難しいですね。

○足羽教育長
　半分にするというのは、県庁全体ではそういう体制で、教育委員会事務局では半分とまではいかなくても、３分の１は休む、自宅だったり、部屋があったら分散しろというのは

全所属やっています。学校はなかなか休むということにはならないので、学校に指示しているのは、もし空き教室があれば、先生方が学年別に半分ずつに移るようにと。教務室に一堂に会さないような工夫をお願いしたいということは言っています。

○鱸委員

学校においては教員というのは本当にエッセンシャルな職業だと思うし、その立場だと思うんです。最終継続ということになれば、そういうふうに罹らないという方針、罹ってもこの割合の方は、運営していくために分けておこうとか、そういう対策はあるんでしょう。もしこれが進んでくれば、医療は今そうなりつつあるんですが、濃厚接触者はこういう条件にしたら働かざるを得ないということが、既にうちの病院のクラスでも検討しているんです。毎日例えば、３日、４日続けて検査して、あんまり患者さんと接しないところの人間はこうしようとか、もう既にうちの病院でも４、５人が濃厚接触者で出てこれない。キーパーソンになってくる理学療法士とかの人は、なかなか大変なんですよね。だから、そういう場合にお聞きしたのは、学校はこういう状況になったら、こういう検査をして濃厚接触であるけど継続するよと、濃厚接触者も出てこいというようなＢＣＰの考え方というのは今は全然現場にはないということでしょうか。

○林次長

これからですね。今あるのは、短くできる対象の範囲をどこにするか。まだそこも一般的にはお医者さんなり、警察、消防というのは言われているんですけど、それがどこまでにするかというのはまだ検討と。そこの意識は持ってやっていかないといけません。

○鱸委員

ただ、感染力が強いので、準備して考えておくということは心要なことだと思うので、是非考え方だけでもやっぱり内部でディスカッションしていくことが必要かなと思いましてお聞きしました。

○足羽教育長

貴重なご意見だと思います。頭の体操をしておかないと、いざとなった時に、子どもたちももちろんそうですが、先生方が感染あるいは濃厚接触になって、１週間、１０日休めば、相手も止まるということになるので、国の方針等も踏まえながら、独断でやるというわけにもならないので県全体の動きも踏まえて、検討をしておくべきかなと思いますので、またちょっと検討してみたいと思います。

○足羽教育長

　それでは、本日の定例教育委員会、ちょうど１２時になりますので、これで閉会としたいと思います。次回は２月９日午前１０時から開催したいと思いますが、いかがでしょうか。総合教育会議が２月７日に予定されるというふうに情報が入っております。

　それでは定例教育委員会は２月９日１０時からということでよろしくお願いしたいと思います。以上で本日の会議を終了したいと思います。どうもありがとうございました。